

---

第343回（4月17日開催）

「アジア成長トライアングルへの事業投資の検討」

—新アジア共同体への日本企業のイニシアティブ—

日本貿易振興機構(ジエト) 理事 朽木昭文氏

アジア地域の開発戦略として作り上げた「フローチャートアプローチ」を、私は15年前にはJリーグモデルと称していた。1993年にサッカー産業が一夜にしてJリーグという名のものに成立した。その後、あっという間に野球と肩を並べた。世界に進出するという構想を掲げ、その通り、ワールドカップに3回続けて出場している。

開発戦略として学ぶべきポイントは3つある。一つ目は、外国の選手をうまく使った。二つ目は、外国選手を受け入れるための受け皿（給料、待遇等）をうまく整備した。三つ目はそのお陰で日本の選手が良く育った。この二つ目の外国選手を受け入れる受け皿のことを私は「キャパシティ」と呼び、非常に重視している。

企業が進出する上では、そこに派遣された社員の方々がいかに生活をエンジョイできるかということがとても大切である。最近では、家族で赴任しても楽しめるという生活環境も大事になってきている。

企業の集積、つまり企業を集めるというのが産業クラスターの第一段階である。企業が集まるためにはアンカーになる企業の進出が望まれる。広州には、日産、トヨタ、ホンダが進出している。3つの日本の自動車メーカーが一つの市に入ったという例は、世界中にこの広州市において他にない。ひとつの広州市の中に、1998年、2002年、2004年と3つのアンカー企業が入ることによってその街が一変する。

ラオスはなかなか発展しないだろうと言う皆さんも多いが、ラオスが10年～15年で発展することは間違いない。私はそう思っている。広州とバンコクに挟まれて東西回廊と南北回廊という道路がどんどん整備されている。そうするとラオス全域が発展するとは言えないが、どこかにこの産業クラスターが形成されることは間違いない。それがビエンチャンなのか、サバナケットなのか、まだ分かっていないだけである。

誰が企業集積の受け皿となる工業団地をつくるのだろうか。キャパシティを充実させる推進母体になるのだろうか。地方政府がその役割を担う重要な存在となる。